

檜崎城跡の総合調査概報Ⅱ

府中市久佐町檜崎城跡と国人檜崎氏

田口義之

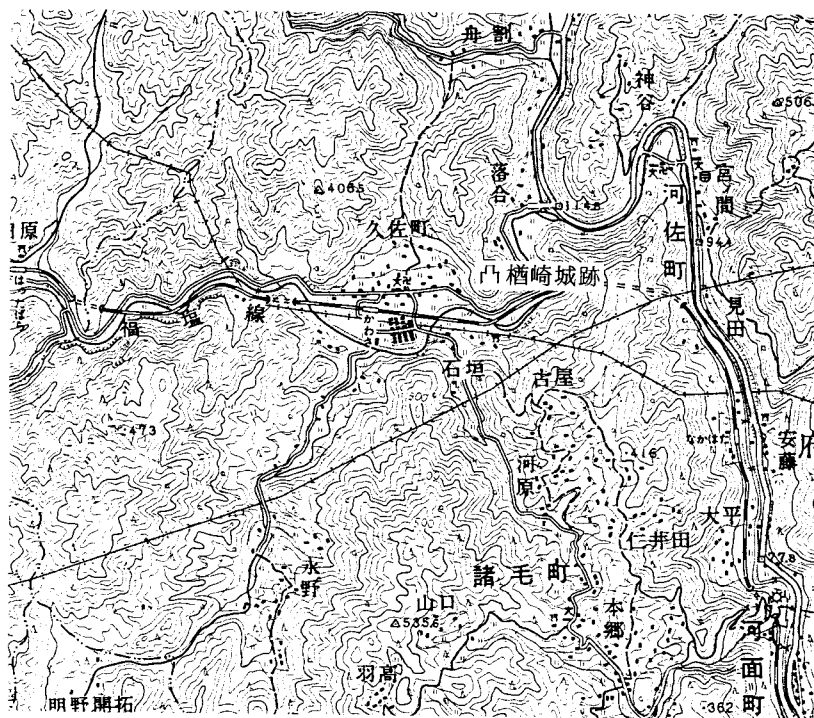
(はじめに)

福山市の中心部から芦田川を逆上ること約二十キロ、府中市の市街地を過ぎると芦田川の流れは同市父石町で二股に分れる。北から合流するのが本流で、更に逆上れば八田原ダム(建設中)、三川ダムを経て世羅台地の源流地帯に達する。

本稿で紹介する檜崎城跡は、この芦田川が世羅台地から府中市の平野部に出る直前の同市久佐町に存在する中世山城跡である。城主として檜崎氏の名を伝え、地理的に見ると、初めに述べた芦田川の水運を押えると共に、備後中部の穀倉地帯世羅台地から備後の平野部へ通ずる古道の出口を扼すという、政治、経済上の好位置を占めている。

城跡は、芦田川の上、中流地帯に点々と分布する小規模な河谷平野の一つ、河佐盆地の東を画す朝山の山頂に残り、主峰の郭群と共に北方尾根続きにも郭跡が認められ、城名「朝山二子城」の由来となっている。

本会城郭研究会では、福山市周辺の中世山城の実態調査の一環として、昭和五十九年より同六十一年にかけて、この檜崎城跡要部の平板測



0 500 1000 2000
5万分の1 府中

檜崎城跡附近

量、及び周辺に関連遺跡の分布調査を実施した。以下はその報告である。

(調査参加者)

新祖隆太郎 (三次地方研究会)

田口義之、七森義人、山下好和、後藤匡史、佐藤洋一、小寺幸一、佐藤錦士、高橋安子、牧平雅美、塚本 彰 (以上備陽史探訪の会)

(調査日誌)

昭和五九年 (一九八四) 十二月九日

城郭主要部の平板測量を行なう。

同 六〇年 (一九八五) 二月十日

城郭主要部の測量を終える。

同 年 四月二一日

朝山の残り部分と北方尾根続きを踏査する。

同 年 五月一九日

城下の遺跡、地名調査を実施する。

同 年 七月二八日

周辺の中世石造分の分布調査を行なう。

昭和六十一年 (一九八六) 一月十九日

周辺の古道の調査を実施する。

猶、城郭の平板測量は新祖の指導によって行ない、石造物、地名の分

布は七森が中心となって実施した。

(榑崎城跡に関する研究の経過)

榑崎城跡は、戦国時代備後の有力国人とし活躍した榑崎氏の本拠として知られ、江戸時代より注目されて来た山城の一つである。

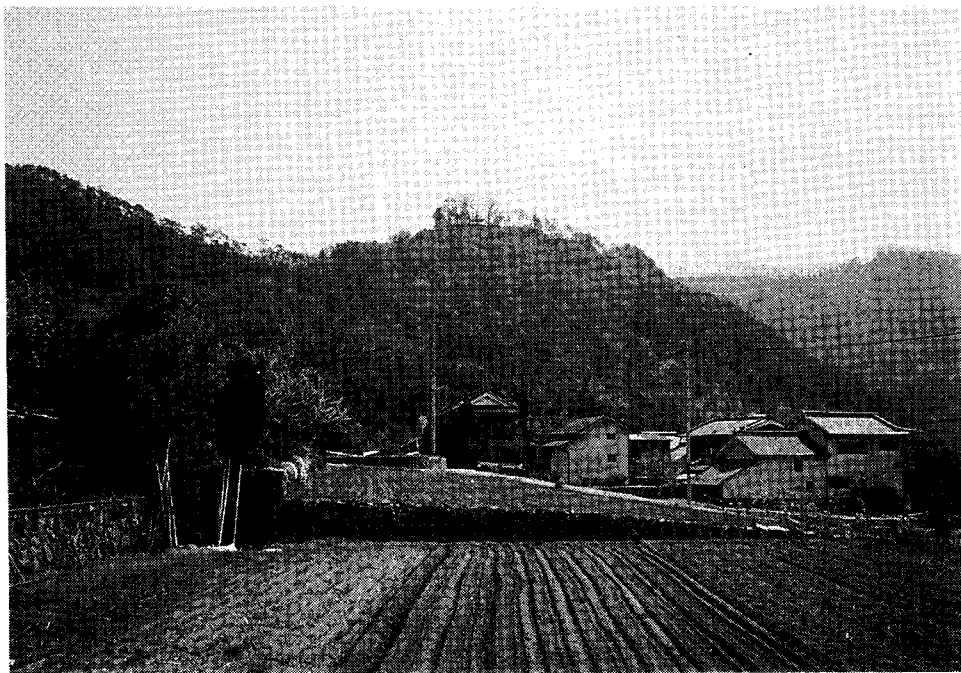
古くは戦国末期に初稿本が成ったといわれる『備後古城記』にもその記述が見られ、江戸後期に続々と著わされた備後の地誌、『備陽六郡志』、『西備名区』、『福山志料』等にも城主を中心とした多くの伝承が収録されている。

なかでも『福山志料』は、城跡に「高さ五尺丈」の石垣が残ると記し、城主榑崎氏の伝承と共に城跡自体も識者の関心を呼んでいたことがわかる。

榑崎城跡を、主に城主の履歴にしばって初めて学問的な検討を加えたのは大正十三年発行の旧版『広島県史』である。この書は本格的な歴史書ではないが、江戸期の文献と異なり、史料として評価の高い長州藩関係の記録を引用している。ここに備後の中世山城研究は初めて近代史学の洗礼を受けたと言える。

右のように城主についての研究が比較的早い時期に始まったのに対し、山城遺跡としての研究は大部遅れる。

備後郷土史界の大先輩、得能正道が紀行文『榑崎城趾踏査并今高野久井稻荷御調八幡参拜』(備後史談八一十二 一九三三)で「頂上は三槽となり、最も高き槽は僅かに方四、五間、中央に五輪石塔の風輪と水輪との残れるを見る」と述べているのはその最も早い例に属している。



榑崎山城跡遠望（西方より）

その後の枳殻櫻村『榑崎城址の研究』（まこと38号12 一九五三）、
和田嘉郎『榑崎城』（日本城郭全集十二 広島、香川、徳島版 一九六
七）の各論考に於ても主な視点は城主榑崎氏の動向にしぼられ、遺構に
ついての観察は目新しいものは見られない。

この現状に対して、榑崎城跡の山城遺構としての研究を一步進めたの
は『日本城郭大系』の出版（巻十三広島、岡山版の発刊は一九八〇）で
ある。これは新人物往来社が各県の第一線研究者を動員して、全国の山
城跡を県別に紹介したもので、特に広島県の場合は、県内の埋蔵文化財
専門家がその任にあたり、各山城跡を考古学的に取り上げたことに大き
な意味があった。又、一九八三年には芸備友の会が『広島県の主要城跡』
を刊行、ここに榑崎城跡を含めて、県内山城の本格的な研究が始まった
と言える。

（城郭の現状）

榑崎城は、河佐盆地の北東にそびえる標高三百四十一メートルの山頂
より西南に派成した一支峰、朝山の山頂に築かれた中世山城跡で、城跡
の最高所は標高二百七十一、五メートルを計り、麓よりの比高は約百三
十メートルである。

①郭は、東西に細長い平坦地で東西五十七メートル、南北二十二〜十
八メートルの規模である。北、東、西の三面はやや丸みを帯び、南面の
②郭に接する部分は直線によって構成され、現在、中心からやや西側に
神社の社殿、及び拝殿が建っている。

この郭で注目されるのは、中央南端に残る高さ約一メートルの小台地である。この台地は、上面に東西七メートル、南北六メートルのほぼ正方形の平坦地が残り、ここには後世でいう天守閣にあたる城の中心的な櫓が建っていたものと推定される。

②郭は、①郭の南に約一、五メートル低く築かれた平坦地で、東西約五十四メートル、南北最大二十一メートルを測り、西が広く、東に行く程狭くなるいびつな平面をしている。この郭には、西南部の現在の登山道入口附近にほぞ穴の刻まれた礎石が存在し、①郭と共にこの城の中心的な役割を果たしていたものと推定される。

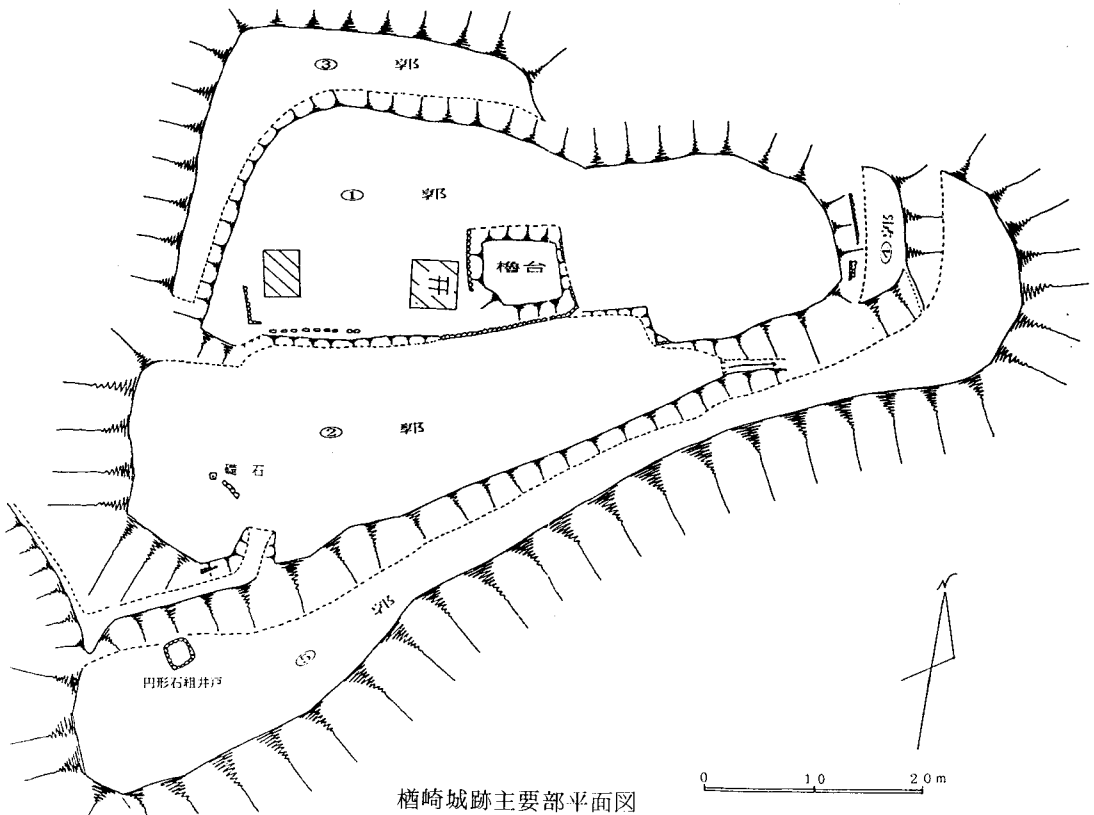
③郭は、①郭の北側に約三メートル低く築かれた平坦地で、幅平均八メートルで①郭北西部をはち巻き状に取囲んでいる。

④郭は、①郭東端から約一、五メートル下って築かれた南北十二メートル、東西四メートルの半円型の平坦地で、後で述べる②郭東端部の虎口を守る役目を果たしていたものと推定される。

⑤郭は、②郭の南から④郭の東にわたって約五メートル低く築かれた長大な郭で、長さ約百メートルに達する。東端と西端は腰郭状に広がり、その中間は幅四、五メートルの帯郭状の細長い平坦地となっている。

又、この郭の西端山側には径二、五メートルの円型石組が残り、井戸跡と推定される。

⑥郭は、⑤郭西端を囲むように築かれた長さ約六十メートル、幅最大十二メートルの半円型の平坦地で西側は土塁によって画され、東端は小径となって空堀①の堀底に達している。⑥郭との高低差は約一七メートル



榑崎城跡主要部平面図



⑤郭に残る石組円型井戸跡

ルである。

空堀①は、⑤郭東端の東に約十メートル下って尾根に直交して築かれた堀切で、幅約四メートル、深さ約一、五メートルを計り、東側尾根続きとの連絡を断っている。

空堀②、③、④は、③郭から西北に続く尾根に直交して築かれた堀切で、空堀①と③郭との高低差は約十五メートル、いずれも幅三メートルから四メートルを計り、谷側は両側共堅堀となつて約二十メートル伸びている。この空堀群は西北の主峰に続く尾根からの攻撃に備えて築かれた、いわゆる城の「尾首」にあたるもので、②と③、③と④の間には尾根の両側に堅堀が築かれ、きわめて嚴重な構えとなつている。

空堀⑤は、朝山と西北主峰との鞍部に尾根に直交して築かれた堀切で、堀底は道路となつている。

この城で注目されるのは堅堀の多用と石垣の使用である。堅堀は、③郭西側と⑥郭西側から南側、及び⑥郭と空堀①との間に、いわゆる「畝状」に分布し、規模は現状では幅三、五メートル、深さ〇、五メートル程のものであるが、各々谷側に二十メートル前後伸び、城の西南、及び南面の防禦力を高めている。石垣は①郭の小台地の周囲、及び①郭東、南面の一部に残り、高さはいずれも約一、五メートル、使用された石も径二〇センチ前後の小規模なものであるが、周辺の山城では類例が少なくこの城の大きな特徴の一つとなつている。

現在、この城の①郭には高竈神社が鎮座し現在の登山道は空堀⑤の堀底道から南に分れ、⑤郭の西北部を通り、②郭西南部に取りついている

が、⑥郭の存在と水の手（⑤郭の井戸跡）の位置からすると、このコー
 スはやや不自然である。もし、現在の登山道を本来の登城道とすると、
 城の一番大切な水の手を真先に敵手に渡すこととなり、城の生命取りと
 なるのである。

郭の配置等から推定すると、当初の登城道は、まず⑥郭西北で城内に
 入り、⑥郭内を通過して空堀①に至り、堀底から③郭東北部を通過して②
 郭東端の虎口に達し、ここより②郭①郭に至っていたのではなからうか。
 こう考えると、⑥郭西北を画する土塁は城の虎口を形成していることに
 なり、④郭は③郭東北部から侵入する敵と②郭東端の虎口に対して横矢
 の位置を占めることになり、共にその存在が生きてくるのである。

猶、この城の性格を考える場合、空堀⑤の堀底を通る道は重要である。
 現在、空堀⑤の北側に若干の平坦地が認められ、道はこの部分でくの字
 に折れ曲っているが、これはこの部分が両側から登ってくる通行人に対
 して虎口を形成していたことを意味している。この道は、芦田川に沿う
 現在の県道が整備される以前、甲山方面から府中方面を結んだ街道で城
 はこの街道に対して関所の位置を占めているのである。

榑崎氏について

府中市久佐町を本拠に戦国時代備後国人衆の一人として名を馳せた榑
 崎氏は、その系譜によると出雲の国人である湯原氏の庶流にあたり、近
 江国犬上郡榑崎村に居住したため榑崎氏を称したと伝えるが、その出自
 や備後入部の時期等不明の点が多い。

榑崎氏の備後入部の時期については、一般に、鎌倉時代末期の正慶二
 年（一三三二）、榑崎豊武が足利尊氏より軍功の賞として、備後国芦田
 郡久佐村の地頭職を与えられ、同地に榑崎城を築いたことに始まると伝
 えるが、この説には疑問の点が少なくない。
注②

弾正忠

与兵エ吉蔵

正兵工

元兼

元好

就継

慶長元年九・八死

寛永八・五死



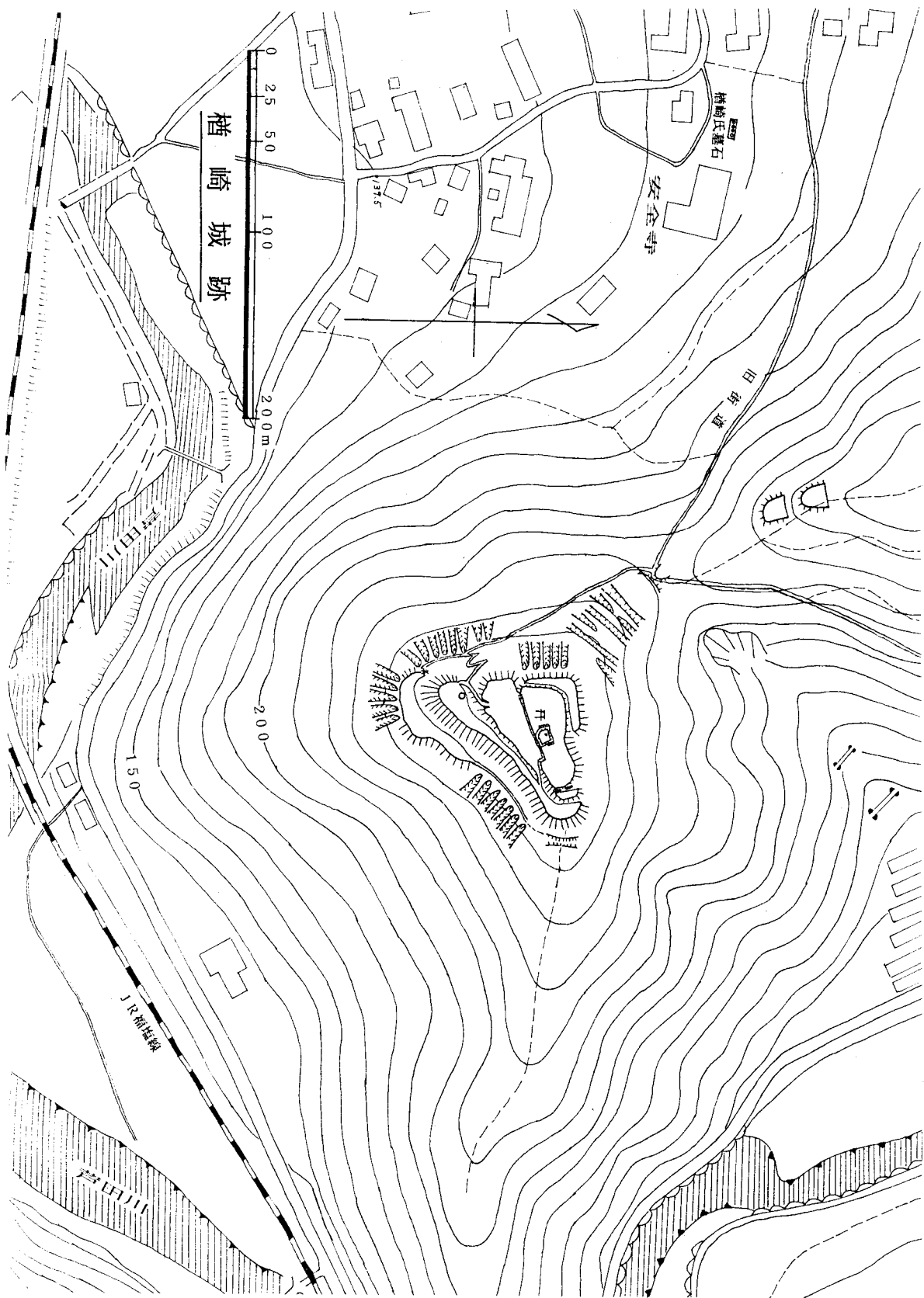
改藤原姓

享禄三・三・廿二死

弘治二・十・十四死

始仕毛利氏

（広島県史 大正十三年刊 所収榑崎系図）



まず、〃正慶〃の年号が問題である。正慶は、元弘の変で後醍醐天皇を廃した鎌倉幕府の立てた光厳天皇の年号で、『西備名区』の著者が言うように、この時期は〃尊氏はまだ土を封ずる勢ひ〃ではない。

更に問題になるのは、南北朝期以降、榑崎氏の本拠久佐(草)村の所職は、足利氏より尾道浄土寺、京都西芳寺に与えられており、この間榑崎氏の名は関係史料に全く現われないことである。

『浄土寺文書』によると、尾道浄土寺に与へられたのは、草村公文職で、室町幕府初代將軍足利尊氏より、暦応二年(一三三九)十月六日、〃浄土寺塔婆婆料所〃として寄進されたという由緒を持ち、室町後期の文明十五年(一四八三)まで浄土寺の所領であったことが確認される。

一方、京都西芳寺が有していたのは、「草村国衙并地頭職」で、〃国衙〃とはこの地が備後国衙領(公領)であったことを意味し、又、〃并地頭職〃とあることから、西芳寺は浄土寺領を除いた久佐村全域の支配者であったと思われる。このことは長享二年(一四八八)という若干遅れた時期の史料^{注⑤}に現われるのであるが、西芳寺は五山系の有力寺院であり、その知行は室町初期に逆上るものと考えてよい。

そこで注目されるのが、榑崎氏の備後久佐村入部を戦国時代とする一連の資料である。

『備中府志』や『三備史略』によると、榑崎氏は元々岡山県新見市鳶巢山城を本拠とした備中の有力国人で、榑崎豊景の代永祿四年(一五六二)毛利元就の命によって備後久佐村へ移住したという。

備中に於ける榑崎氏の初見は南北朝期に逆上り、貞治元年(一三六二)

山名時氏の武将として榑崎氏の名が見える^{注④}。又、『東寺百合文書』によると、榑崎氏は東寺領新見庄周辺の有力国人としてその名が見え、明徳元年(一三九〇)十一月には、榑崎備前守の子息鶴寿丸は東寺公文所より東寺領備中新見庄の〃領家方公文惣追捕両職〃に補任されている^{注⑤}。

これら一連の史料から推定すると、榑崎氏は元備中北部の国人で、それが室町後期から戦国時代にかけての或る時期、備後に本拠を移したのではあるまいか。備中の国人で備後にも本拠を有した者には甲奴郡の新見、伊達両氏^{注⑥}があり、その蓋然性は高い。

但し、その時期を永祿四年とするのは年代的に無理があるようである。備後に於ける榑崎氏の徴証は天文年間^{注⑦}に逆上り、弘治三年(一五五七)十二月の毛利元就他十七名連署起請文案には他の備後国人と並んで、榑崎彦左衛門尉信景の名があり、既にこの時期、榑崎氏は備後国人として活動していることが確認される。

『福山志料』巻二十一、芦田郡久佐村、朝山二子城の頃には、正慶二年の榑崎豊武築城説の他に、三河守宗真の築城説を挙げており割注で「〇元年コ、ニ来ルト云」としている。

「〇元年」では全く意味が通らず、これは同書の刊本に脱字があることを示しているが、榑崎三河守宗真は、享祿三年(一五三〇)三月二十一日に没した人物で、前記信景の曾祖父にあたる人である。又、『芦品郡誌』によると久佐村八幡神社は享祿年中榑崎三河守の再建を伝えており、榑崎氏の備後移住は大概この頃と考えられる。

ちなみに、備中国人としての榑崎氏は、文明十一年(一四七九)の備

前守を最後^{注⑧}に姿を消しており、榑崎氏の備後移住がこの時期以降、享祿年間までの間であったことを示している。

備後榑崎氏は、天文年間以降、毛利氏旗下の部将として活躍しており、特に豊景、信景、元兼三代の活躍は目覚ましく、^{注⑨}その所領も天正年間には久佐村以外に世羅郡内にも存し、『毛利家八ヶ国時代分限帳』によると、天正末年の榑崎一族の総知行高は、年貢収納高で千八百石に及んでいる。

しかし、慶長年間（一六〇〇）の関ヶ原合戦は、この榑崎氏の運命をも一変させた。榑崎氏が主と仰ぐ毛利氏は西軍と同の罪によって領国を防長二ヶ国に削減され、榑崎氏も備後の本領を失ない、長州藩毛利氏の一家臣として近世を生き延びて行くことになるのである。

まとめ

さて、この榑崎氏と榑崎城跡の関係は、いうまでもなく、国人とその居城の関係にあたる。

但し、前節で述べたように、榑崎氏の久佐入部の時期が今までに言われて来たような鎌倉時代末期ではなく、戦国初頭であったとするならば、その築城時期、性格等も再考が必要である。

榑崎城跡は、その築城者を、今まで通り榑崎氏とするならば、戦国初頭の年代が与えられる。これは現在残る石垣、塹堀の存在から考えても、^④とも妥当な推定である。

しかし、その性格については、前節の推論、すなわち、榑崎氏が戦国

大名毛利氏によってこの地へ移されたとする説が正しいとすると若干変ってくる。つまり、その築城に関しては、当然毛利氏の意向が働いていることが推定されているのである。

これは、現在残る遺構からも十分首肯できるものである。榑崎城は、城跡の現状のところ述べてのように、世羅郡から芦田郡の平野部へ出る旧街道に対して関所の役割を果たしていた山城である。

これは、確かに国人領主榑崎氏の所領支配にとって有効であったと思われるが、それ以上に戦国大名毛利氏の備後支配にとって重要な意味を持つていたのではあるまいか。内陸部の安芸吉田に本拠を持つ毛利氏にとってここは備南平野への出口として重要な位置を占めていたのである。

永祿十一年（一五六八）八月、備後神辺城合戦に於いて、榑崎豊景はその奮回作戦の中心的な役割を果たしており、^{注⑩}史料上からも榑崎氏と毛利氏の関係が、他の備後国衆のそれ以上に親密であったことが認められるのである。

猶、居館、その他城跡の関連遺跡に関しては『山城志』十集（一九九一）の七森報告（府中市久佐町の地名調査）によらるたい。

注① 『萩藩閥閥録』巻五十三 榑崎与兵衛等

② 前掲書、『福山志料』等

③ 『蔭涼軒目録』長享二年七月五日条所収西芳寺々領目録

④ 『太平記』卷三十八

⑤ 『東寺百合文書』る函明德元年最勝光院方評定引付

- ⑥ 『備後古城記』等、注⑦にも新見元致の名がある。
- ⑦ 『毛利家文書』二二五号
- ⑧ 『東寺百合文書』けー三二
- ⑨ 注①参照
- ⑩ 注①参照